

新潟市教育相談センター  
新潟市特別支援教育  
サポートセンターだより

# も え ぎ

第 125 号

令和8年1月14日  
新潟市教育相談センター  
新潟市特別支援教育サポートセンター  
新潟市中央区西大畑町458番地1



## 保護者に寄り添うということ

藤 塚 静 治

去る11月5日、当センターにて教育相談研究会が開催されました。詳細については、小紙の見開きページをご一読ください。講師ご自身の経験談を交えたご講演を聴きながら、私も若い頃の経験を思い返し、改めて考えさせられました。

当時、私は不登校のAさんに関わることになりました。関わる機会を増やそうと考え、週に2、3度は家庭を訪ねて母子と会いました。訪ねるたび、Aさんは顔を見せないようにしつつもそっと姿を現し、声掛けには手振りで応えてくれました。その様子から、訪問の頻度が負担になっているのではないかと思いましたが、母親は「いつもすみません。でも、来ていただいてありがたいです」と毎回言いました。その言葉だけを受け取って、私は変わらず訪ね続けました。

ある日のこと、不登校保護者の会の方が来られ、「あなたは相手の気持ちをもう少し分かって努力してみてはいかがでしょうか」と伝えられました。その言葉に、私は少し複雑な気持ちになりました。

今回、改めて振り返ると、私の関わりが母親をさらに困らせていたことに気がきます。母親は、登校できない我が子への私の訪問に言いたいことが言え

ず、我が子には「きちんと会ったらどうか」と伝えなければならなかったことが、切なかったことと思います。母親は他にも悩みを抱えていたかもしれません。私の行動が加わることで、母親をますます困らせてしまったことでしょう。

Aさんの気持ちに寄り添いながら、つながりを切らず、保護者の気持ちや悩みも丁寧に聴き、Aさんも保護者も安心できる関係性を築くべきだったと、改めて感じます。

当時、母親が保護者の会の方に相談されたことは、他に相談しやすい相手がいたということです。母親はまた、市の子ども支援室にも相談していました。支援室の担当者は、Aさんと母親の気持ちを丁寧に聴きました。そして、「AさんのやりたいことをAさんの理解を得ながら一緒に取り組むこと」を私に助言してくれました。Aさんは大好きなボール運動を私と前向きに取り組み、やがて私が訪ねなくても笑顔で会いに来てくれるようになりました。しばらくすると、Aさんは毎日登校するようになりました。Aさんはその後の学校生活も順調に送り、希望する職業に就職することができました。

子どもの支援に当たり、保護者に寄り添うことの大切さを改めて考えさせられた機会となりました。読んでくださいました皆様も、同じようなご経験をおもちでしょうか。

## 令和7年度「作品展」の紹介

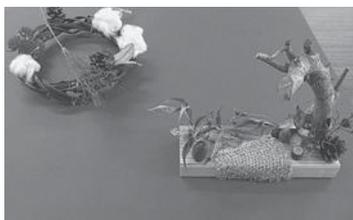
日時：令和8年1月23日（金）

受付・開場 12:30～13:00

音楽発表 13:00～13:15

物品販売 13:20～14:10

会場：新潟市教育相談センター



この作品展は、教育相談センターに関わる児童生徒の活動や成長の様子を保護者や学校、外部の方に見ていただき、理解を深めてもらうことを目的に開催しています。作品展示は、ぐみの木教室や各区教育相談室、「アトリエ」に通室している児童生徒が制作した作品などを展示します。音楽発表は、万代太鼓の演奏を予定しています。また、子どもたちが作った品物を売る物品販売では、ぐみの木教室の通室生が店員になって接客します。多くの方にご覧いただき、子どもたちの接客を楽しんでいただくことで、子どもたちに充実感や達成感を味わってもらいたいと考えております。

なお、作品展当日のセンター駐車場は大変混雑します。気を付けてお越しください。



## 令和7年度 教育相談研究会

# 〈研究主題〉「今見えてくる不登校の課題と支援の在り方」

### ～ 不安を抱える保護者・子どもへの関わり ～

日時 令和7年11月5日(水) 14:00～16:40

今年度は、「今見えてくる不登校の課題と支援の在り方～不安を抱える保護者・子どもへの関わり～」をテーマに教育相談研究会を開催しました。

#### 〈教育相談センターの発表〉

教育相談センターの発表では、不登校の現状と教育相談センターで行っている保護者・子どもへの不登校支援について発表を行いました。



はじめに、令和6年3月に公表された「不登校の要因分析に関する調査研究」(文部科学省委託事業:公益社団法人・子どもの発達科学研究所 R6.3)の結果から、不登校の関連要因の多くは保護者・児童生徒ともに不安・抑うつを訴えていることを紹介しました。また、教育相談センターで受理した相談ケースの分析から、「不登校を抱える保護者・子どもの多くは不安に対応しきれていないという共通点がある」こと、さらに、保護者は、「焦りによって子どもの対応に悪循環が生じている」こと、子どもは「言語化できない不安によって社会とのつながりが保ちにくい状態が生じている」ことを伝えました。

#### ◇『保護者支援』について

教育相談センターに相談に来る保護者は不安による焦りが強く、目の前の子どもに対してのアプローチに悪循環が生じている様子が多く見られます。そんな保護者を支えるうえで、センターでは3つのポイント(①信頼関係づくり、②子どもと向き合うことのできる保護者支援、③伴走的な姿勢での関わり)を意識しながら支援を進めていること、保護者の焦りを和らげるために「見通し」をもたせることが重要であることを紹介しました。

#### ◇『子ども支援』について

教育相談センターに相談に来る子どもの多くは、言語化できない不安を抱えており、それらが複合的に重なり合うことでさらに不安が強くなっている様子が見られます。また、近年の傾向として、活動やコミュニケーションに不安を感じ支援を必要とする子が増えている様子も多く見られています。そこで、センターでは、子どもたちが様々な活動に取り組む際、【活動前】【活動中】【活動後】の場面ごとに、見通しをもたせるための支援を行っていることを紹介しました。

令和6年度に教育相談センター、各区教育相談室で支援した児童生徒の進展調査(再登校あるいは前向きな様子に改善されたのか)においては、93%が進展したという結果が出ていました。不登校支援を進めるうえで、①保護者・子どもの両方を支えること、②保護者・子どもの両方に先の「見通し」をもたせながら支援を行うことが、進展調査の結果に結びついているのではないかと考えています。そして、上記①②の視点で関わることで、これからの不登校支援に求められていると考えています。

#### 〈講演〉不安とは何かについて考える

新潟青陵大学大学院  
臨床心理学研究科

こ ぼやし たい すけ  
准教授 小林 大介様

博士(教育学)  
公認心理師/臨床心理士



「保護者の不安による悪循環へのアプローチ」「子どもの言語化できない不安へのアプローチ」について、センターの実践発表があった。「不安」は人間にとってとても身近なものでありながら、捉えたり取り扱ったりすることが大変難しい。人体を守るための機能のひとつと言えるが、この「不安」によって日常生活に支障をきたす場合がある。不登校に関わる子どもの不安・保護者の不安を支援者が理解することが、よりよい支援の一助となるのではないかと。

#### ◇不登校の捉えについて

不登校に対する社会的な理解や状況は変化しつつある。しかし、カウンセラーとして関わってきた事例からは、本人・保護者にとって、「不登校は辛い状況」であることがほとんどである。

子どもは「学校は行かなければならない」と考えながらも、自分の状況等をうまく言語化できない。保護者は自分にできることに必死に取り組みながらも、状況が改善されないために否定的な認知をもっている。

「生物・器質的要因」「心理力動的要因」「環境的要因」が絡み合っただけで不登校が生じ、維持されていると捉えることができる。いわゆる「原因」が取り除かれたとしても、不登校の解消に至らないことは多い。心理力動的要因に着目し、「子どもの内面に生じている課題」について理解していくことが、支援のヒントになるのではないかと。

#### 〈夜間「学習・進路相談室」・訪問教育相談・各区教育相談室の活動紹介〉

研究会が始まるまでの時間、それぞれの取組や活動の様子について映像で紹介しました。感想を紹介します。

- ・センターでは、夜間に進路相談も行っていることが分かりました。支援を要する子どもや保護者は進路について大きな不安を抱えていると思うので、その部分の支援が充実していることが素晴らしいと思いました。
- ・各区の教育相談室や訪問教育相談、夜間の取り組みを具体的に知ることができてよかったです。



#### ◇子どもの不安について

子ども自身もその正体に気付いていないことが多いが、不登校の背景には様々な種類の不安が存在する。この不安の要因を本人が言語化し、明らかにすることが必要だと思われがちだが、必ずしもそうではない。「不安」を直接扱わないことで、不登校が改善する場合もあるからである。一方で、子どもの中にある不安を支援者が知ることで、本人理解やアプローチの幅を広げることに役立てることができる。また、「分離不安」「社交不安」「全般性不安」は児童期・思春期の子どもによく見られるものであり、その不安の対象や症状を知っておくことが支援に役立つものとする。

#### ◇保護者の不安について

Bahali他(2011)の研究では、不登校の子どもをもつ親は抑うつ・状態不安・特性不安のスコアが対象群と比較して有意に高いことが示された。また、Carless他(2015)の研究では、不登校の子どもをもつ親の自己効力感と親の抑うつ・不安、家族機能、子どもの抑うつ・不安に関連があることが示された。これらの研究を踏まえると、「子どもの不登校」「親の抑うつ・不安の高まり、親の養育自己効力感の低下」「子どもの登校困難の強化」という悪循環が生まれている可能性を指摘できる。一方で、子どもに近い支援者は「不安が強い子どもの原因は親にある」という考えに傾きやすい点に



注意が必要である。その理由として、不登校の問題には保護者の協力が不可欠であり、保護者を味方にするのが重要であるからである。そのためには、支援者には保護者の立場に立った理解が求められる。例えば、「家族の『巻き込まれ』」に対する理解である。保護者の事情を把握し、「そう対応せざるを得ないのだろう」という理解があることで、支援者のアプローチの仕方が変わってくるのではないかと。

#### ◇仮想事例・グループワークで出た意見



・不登校に関わる子どもの不安と親の不安は影響し合う。この不安によって生じているそれぞれの行動も、相互に影響し合っていて表れていると捉えることができる

- ・のではないかと。
- ・子どもが言語化する不安のみが、子どもに生じている不安とは限らない。見立ては多面的に行うべきである。また、限られた情報の中から類推をして見立てることも必要となる。
- ・支援者が行う「提案」が、来談者との関係性構築の障害となる可能性がある。事情の把握、寄り添った対応が必要となる。また、支援におけるアプローチのスタートは、基本的に来談者を対象とすることになることを理解する。
- ・不登校の原因を問い詰めることは、必ずしも問題の解決にはつながらない。しかし、保護者らがそれを求めなくなる気持ちは、支援者として理解する必要がある。

#### 〈研究会参加者の方々の感想〉

- ・「言語化できない不安に寄り添い支援する」という言葉にとっても感銘を受けました。「言語化できない不安」というところに何かしらの問題を抱えている子どもたちの本質が潜んでいるように感じました。そして、ここに介入していくことの難しさを再確認しました。やはり受容と傾聴を基盤とした聞き取りやコミュニケーションを日常から継続的かつ自然に実施していくことが大切だと感じました。
- ・「不安」というキーワードが、今の時代とても大事だと思っていて、その研究テーマに期待感をもって参加しました。特に、講師講演の中で、①保護者と面談する意義の再確認、②限られた情報から見立てを立てる大切さ、③親に責任を求めるのではなく、新たなチャレンジを行うパートナーとして連携する大切さ、を学びました。
- ・これまで向き合った不登校事案について、記憶を辿りながら聴講しました。結果を急ぎすぎないこと、保護者を含めてチームになること、言葉にできない思いを想像することなど、共感できるお話を沢山聞くことができ、大変勇気づけられる思いでした。
- ・不登校については、解決法があるわけではなく、本人や親にただ寄り添っていくことで自然と解決する場面が多いということを知りました。
- ・登校しづらいなどがあると、原因を知りたい、突き止めなくては、という思いになりますが、子どもが抱く漠然とした不安には様々な要因が絡み合っているため、様々な視点で考え向き合っていくことが大切だと感じました。また、保護者に対しても同じで、何かをアドバイスすることに重きを置くというより、置かれている状況を汲み取り、受け止めることを大切にしたいと思いました。



## 支援部の活動紹介

子ども支援部主任 長澤 靖子

今年度、午後に行うコミュニケーションタイムの活動をリニューアルしました。美術館での絵画鑑賞、新館の2階3階を全部使った宝探しゲーム、造形活動や道徳、科学実験などでも新しい活動を取り入れています。新しい活動に子どもたちは目を輝かせて取り組んでいます。

また、通室生同士の関わりにも変化が見られます。前期は、ドッジボールや鬼ごっこで声を上げて楽しんでいました。最近では、自分たちが考案した「経済ごっこ」をみんなでやるのが多くなりました。自分たちで事業を展開し、どうしたら利益を生むか考えながら互いに交渉し、「ぐみの木通貨」で売買を成立させます。次第にどうしたら経済を回せるか考え始め、品物を売ったり、サービスを買ったり、株や融資、事業の合併などを考えては交渉を始めます。通室生同士が誘い合って「経済ごっこ」を始め、気付けば通室生全員が互いに交渉しながら関わり合う姿に子どもたちの成長を感じます。

勉強も、体験活動も、コミュニケーションも、その人なりのペースで進めることができるのが「ぐみの木教室」です。「ぐみの木教室」が通室生にとって心の居場所になることを願って、スタッフは支援しています。

## 『心のリズムに寄り添って』

子ども支援部講師  
新潟万代太鼓「華龍」代表 田村 佑介



教育相談センターにおいて太鼓指導の機会を頂いて以来、この場は私にとって多くの学びを得る大切な場所となっています。子どもたちと向き合う度、かつて私自身が学校に足が向きづかった頃を思い起こします。教室に行くことが難しい日が続いても太鼓の稽古がある日には不思議と体が動き、自然と通うことができていました。しかし、当時の私は「学校に通えていない」という事実をどこか後ろめたく感じており、たとえ現在のような支援の場があったとしても、そこに踏み出す勇気はもてなかったであろうと思います。そう考えますと、ここに通われている児童生徒の皆さんは、すでに大きな一歩を踏み出しているのだと深く感じます。

同じような経験をもつ者として、子どもたちの心情に可能な限り寄り添いたいと考えています。また、この場は、私自身の学びの場でもあります。あらかじめ定められた型にはめ込むのではなく、その時々に出会う一人一人を尊重し、多少の凸凹があっても、各々にふさわしい形を共に作り上げていくことを大切にしたいと思います。

まずは、指導する私自身が太鼓を楽しみ、子どもたちとできる限り同じ目線に立つこと。そうした姿勢が心を開ききっかけになると信じています。また、この場はかつてお世話になった先生方との再会の場でもあります。「和は輪に繋がる」という言葉のとおり、常に穏やかで楽しい環境を保ちながら、これからも太鼓を通じて子どもたちと向き合っていきたいと思っています。

## 夜間「学習・進路相談室」から

一言に心を込めて・・・

夜間「学習・進路相談室」主任 坂井 毅

夜間「学習・進路相談室」では、人との関わりや学習・進路に不安を抱える中学生に対して、学習支援や進路相談を実施し、社会的自立や進路目的の達成に向けた支援を行っています。

通室を希望する中学生の中には、悩みを抱え、どう解決したら良いかわからず、自信を失いかけている子どももいます。

子どもへのさりげない一言が、心の中の暗がりに灯をともすことがあります。

そこで、今年度は、通室した中学生を笑顔で迎え、気負わず、飾らず、そして真心を込めて、心からの声かけを大切にしています。

継続して通室できたことや職員からの「一言」が、多くの通室生の自信に繋がりました。

また、通室生の気持ちを和ませるために、職員とのゲームや会話を学習前に取り入れています。そうすることで、通室生の表情や気持ちに変化が表れ、笑顔で気軽に話せるようになりました。中には、カードゲームを複数の職員や保護者と一緒に楽しむことができる通室生もみられました。

通室生にとって、夜間「学習・進路相談室」が、心のオアシスとなり、新たなステージに踏み出すための大きな力を与える場所となるように、心を込めて支援していきます。

## 自分を見つめて回復する場に

秋葉区教育相談室 本田 和彦

レインボールーム(秋葉区子ども支援室)は、新津駅から徒歩10分、新津図書館の2階にあり、子どもたちが利用しやすい環境に位置しています。毎日10名前後の小・中学生が利用しており、多いときは15名以上になります。



レインボールームの活動は、静かに一人で学習や自分の時間を過ごすことに重点を置きます。定期的にイベントを設け、希望者が参加しています。継続して利用する多くの子どもたちは、学校復帰につながる心の回復を見せています。その過程では、まず家庭での親子間の関係の改善が起こり、次に当室の利用が始まり、継続して利用できると心が回復し、日常活動以外のイベントも楽しめるようになってきます。すると、学校にも時々顔を出せるようになるようです。写真は、レインボールームの目玉の一つである創造活動で行った卓球大会と、カラオケ大会の様子です。その日は、来室12名中10名が参加し、それぞれが同じ空間で行われ、希望する活動に参加して楽しみました。



回復の道のりは様々ですが、家にいるよりは、あまり干渉されない場で自分の時間を過ごすことが心の回復には欠かせないようです。いつでも利用をお待ちしております。

